



スポーツには人と人の心をつなぐ不思議な力がある。スリランカでバレーボールは国技、クリケットは国民的人気のあるスポーツの一つだ

## スポーツを通じて 新たな道を切り開く

2009年5月、四半世紀にわたる民族紛争が終結したスリランカ。  
今まさに復興の真っただ中にあるこの国が取り組むべきことは、国の未来を支える“人づくり”。  
それに多大な貢献をしているのが、青年海外協力隊が取り組む“スポーツ”だ。



### 光り輝く島、スリランカ

2月中旬、コロンボ空港に降り立つと、もわっと生温かい空気が肌に触れた。目を開けていられないほどの強烈な日差し。「ちよっと前までは涼しかったんだけどね。これからどんどん暑くなるよ。人々は口々にそう言う。冬真っただ中の日本から来ると、その暑さがジリジリと突き刺さるように痛く感じる。

光り輝く島「スリランカ」は、シンハラ語でそう表現される。旧首都コロンボから海岸線を南下していくと、なるほど、この言葉に象徴されるように、キラキラ光る美しい海が見えてきた。

しかしここは、2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害で多くの人が命を落とした場所。被災した状態のまま、骨組みがむき出しの建物が残っている場所もある。車窓を眺めながら当時の惨劇を想像するだけで、背中がゾクゾクとした。

### バレーボールで民族融和を

「エカ、デカ、エカ、デカ（イチ、ニ、イチ、二……）」

グラウンドを走る子どもたちの元気な掛け声が、真っ青な空に響き渡る。南部州の州都ゴー

提案だった。「ボール一つあればできる。それがバレーボールだったんです」。

「次は、一つずつボールを持ってきて」

準備運動の後は、サーブ、レシーブ、トスの練習だ。

佐藤さんとはにかく、基礎練習に時間をかける。すべては試合に勝つため。に必要なこと。どの子の瞳も真剣そのものだ。「最初はボールが一つしかなくて、ゲームしか練習ができていませんでした。でもきちんと基礎から固めていくためには、ある程度の数が必要でした」。しかし、やはり高価なもの。「どうしようかと悩んでいたら、日本の友人とNPO法人フレンドリー岐阜の方が協力してくれることになって」。今では、佐藤さんの仲間の思いが詰まった10個のボールで練習に励んでいる。

スニルさんの思いは「とにかく強いチームにしたい」。でも佐藤さんは、「勝負」に強くなるためには、練習を強化するだけではだめ。スポーツマンとして、規律を守ることこそ大事だと考えた。「グラウンドにはごみをポイ捨てしない」「練習中はガムをかまない」「大きい子



ゴールに向かう途中の海岸線には、所々に津波の爪あとが残っている

「一日中、施設で過ごしていると、精神的に不安定になってしまったり健康にもよくない。でも太陽の下で体を動かせば、心身ともにリフレッシュできますよね」。

「何とかその状況を改善しようと、石垣さんがスタッフのラシカー・ギーターニさんと取り組んでいるのが、スポーツを通じてレクリエーション活動だ。」「

「複雑なバックグラウンドを持つ人たちが故に、共同生活は容易ではない。けんかやめ事は日常茶飯事だ。更生施設だけに、裁縫やスパイスの袋詰めなどの職業訓練が行われているものの、一度入ると出所するのが難しいのが現状。きちんとした身元引受人がいないと、また同じ問題を繰り返してしまう可能性があるからだ。」

「将来への希望が持てない女性たち。」「職業訓練にも参加せず、一日ぼーっと過ごしている人もいます。特に精神障がいのある入所者に対しては、どう

「は小さい子に教えてあげる」「後片付けはみんなでする」。当たり前前の子ができていない子どもたちに、厳しく伝え続けた。最初は嫌がりたりズルをしたりする子もいた。しかし、次第に彼らは変わっていった。

「そしてもう一つ、佐藤さんが力を入れてきたことがある。それは、バレーボール部をタミル人とシンハラ人の交流の場にするのだ。この学校はスリランカでも珍しく、両民族が同じ校舎で学んでいる。しかし授業は別々に行われているため、



佐藤さん(38歳・北海道)の話を真剣に聞く子どもたち。「厳しいけど、先生のごことは大好き!」



(上)スパイスの袋詰めにも励む彼女たちは、終わりのない作業に、何を思っているのだろうか  
(下)石垣さん(30歳・山形県)は日ごろから入所者とのコミュニケーションを欠かさない。「真正面から向き合っていると、だんだん心を開いてくれるようになります」

「毎週日曜日、小さなスペースを使って、バレーボール、クリケット、バドミントンを指導。参加は自由。毎回10人程度が常連で集まってくる。」

「スポーツをすると、気分が落ち着くんです」と話すのは、入所者のスシラ・マーガレットさん(34)。うつの症状があり、部屋の隅で涙を流していることも多いという。「実は、今までスポーツはあまり経験がなかったんです。でも、サユリが丁寧に教えてくれて、だんだん楽しくできるようになりました」と笑う。また、「クリケットが一番好きなの」とはにかみながら話してくれたのは、シンギティ・クマリーさん(19)。「みんなで一緒にできるのが、とてもうれしいんです」。

「国三位。もちろん、目指すは全三国制覇だ。でも佐藤さんは、負けてもいいんです。みんなで協力して一生懸命やること、喜びや悲しみを分かち合うことに意味がある。でもそれができるようになれば、簡単には負けない自信があります」。

「バレーボールの面白さは、

「目に見えた差別があるわけではない。でもやはり両民族の間には、長年の紛争による大きな壁があった。」「2つの民族混合で強いチームにしたいと思ったんです」。スニルさんにそう話したところ、彼もずっと同じことを考えていたが、周りの目もあり行動に移せなかったことを知った。「これこそ、外国人の私ができることだと思えました」。タミル人の子を見つけては声を掛け続け、今では、3人、4人と徐々に部員が増えている。

「放課後の部活動が唯一交わる機会なのだ。」「でも赴任当時、タミル人の部員は1人だけでした」。

「スポーツをしている時、彼女たちは施設の中とは別人のよう。本当に生き生きとしています。友達を作ること、ルールを守ること、みんなで協力してやること。学ぶことはたくさんあつて、更生のツールにもなっています」

「スポーツには不思議な力がある。」「タミル人とシンハラ人の子どもたち、そして、更生施設で過ごす女性たちを見ていて、そう強く感じた。彼らは確かに、スポーツを通じて自らの問題と向き合い、新たな道を切り開こうとしていたからだ。」

「炎天下のグラウンドでほてった体が冷めないまま、6時間かけてコロナポに戻った。市内に入ると、あちこちで軍の検問に遭遇する。のんびりしたデニヤの雰囲気から一転、車を止められるたびに、ピリピリした雰囲気を感じる。この国では当たり前前の光景なのだろうか」。

「市街地から南へ約30分、国内で唯一、女子専用の更生施設「メッセワナ女子更生施設」がある」と聞き訪ねてみることにした。裁判所から送られてきた軽犯罪者(売春、麻薬、窃盗など)や浮浪者、精神障がい者、知的障がい者などが収容されているこの施設。年齢は18〜60歳、常時約230人が生活する。親に虐待や性的暴行を受けていた人もいれば、身寄りがいない人もいる。

「外で身体を動かして心身ともに健康に」

「一つのボールをチーム全員でつないでいくこと」だと佐藤さんは言う。「このチームで優勝したい!。練習終了後、子どもたちは元気いっぱいにそう答えてくれた。」

(右) 体育担当のラシカーさん(左)と入所者たち。みんなで過ごす楽しい時間。自然と笑顔がこぼれてくる  
(左)「サユリティーチャー!」石垣さんの周りにはいつも人が絶えない

(右) ボールの掛け時計は佐藤さんのもの。「時間を守る習慣がないため、練習もルーズになりがち。常に時間を意識する習慣を身に付けさせるためのものです」  
(左) 佐藤さんの仲間から贈られたボールは子どもたちの宝物。「大切にすぎず、実は数個は倉庫にしまっておくんです」

